

## 平成30年度「海外学校教育実地研究」報告 — オランダ・イギリス 2018年9月5日(水)～13日(木) —

魚山 秀介・三石 初雄・中村理依子・直井 仁美・青山 直樹・  
佐々木 祐・坂内啓太郎・富樫 幸乃・須賀 愛加・古川 明恵・  
小松崎智理・多田 将大・山地 雄斗・祐松 智紀・柏木 志保

帝京大学大学院教職研究科

# 平成30年度・海外学校教育実地研究〈オランダ・イギリス〉

魚 山 秀 介

帝京大学大学院教職研究科

## 1. はじめに

今回で3回目の実施となった本研修は初めて2カ国（オランダ・イギリス）の現地校を視察するという行程で実施した。（表1）これまではイギリスの帝京大学の関連施設（帝京ロンドン学園及び帝京大学ダラム分校）を利用して本研修を実施していたが、特に新学期が9月初旬から始まるイングランドの学校事情により視察校探しが非常に困難となった。そこで、今年度はオランダの現地校を視察してからダラムに移動するという行程を初めて採用した。

## 2. 2018年度の実施状況

### (1) 訪問校

アムステルダムでは、中田先生の紹介でユリアナさん（オランダの現女王と同じ名前）に現地でのコーディネイトをお願いした。2日間で5つの様々な校種の学校（① Montessori School Apollo、② Visserr,t Hooft Lyseum、③ Leiden 大学、④ Enaplan Elementary Carousel、⑤ VINDINGRIJK）を視察するという非常に充実した行程（表1）を組んで頂いた。またアムステルダム市内の社会教育施設訪問の際にはユリアナさんの旦那様にも御協力頂き、アンネフランクの家や国立美術館などを見学した。

ダラムでは、到着翌日が日曜日であったので社会教育施設訪問日とし、分校のバスで大学宿舎からダラム駅まで送って頂き、そこからニューキャッスル駅まで鉄道で全員が移動した。ニューキャッスル市内では各グループ行動をおこない、かつては産業革命で栄えた都市でイギリスの様々な伝統や文化を学んだ。

翌日の午前中は帝京大学ダラム分校長の今関先生から世界遺産ダラム城に関する説明を頂き、須田先生からはイギリスの教育制度について具体的にわか

りやすい講義をして頂いた。また、今関先生にはダラム大学図書館も案内して頂き、オックスフォードやケンブリッジに次ぐ歴史を誇るダラム大学の構内を見聞することが可能となった。

なお、ピンクス Miki さんには Durham Johnston School 及び Durham School の視察を斡旋頂き、訪問調査をおこなった。

### (2) 事前・事後学習

本実地研究は2単位全15回の選択授業であるので第1回目講義として4月23日（18:00～19:30）に説明会を実施して日程の概要や事務手続きについて国際交流センター後藤さんの御協力を得ながらおこなった。その際、イギリスの教育制度について概要説明をおこなった。

第2回目講義である6月19日（18:00～19:30）には冒頭で海外保険に関する説明を担当業者がおこない、その後は過去の海外学校教育実地研究報告が掲載されている年報原稿コピーを参加者に配布して本研修の概要について説明をおこなった。

第3回目講義として7月25日（15:30～17:00）には各視察別に9つのグループ分けをして、次回講義まで事前に調査をおこなってパワーポイントにまとめるよう指示をした。

出国前最後の第4回目講義である8月31日（14:10～15:10）には各グループがそれぞれの視察先についてのプレゼンを行い、お互いに情報共有をはかることが可能となった。そして第5回目から14回講義を現地での視察とし、帰国後の9月26日（13:00～14:30）に第15回目の講義として報告会を実施した。

2018 (平成 30) 年度の旅程表 (表 1)

月日	予定	
9・5	水	出国 成田発→アムステルダム着
9・6	木	Montessori School Apollo, Visserr,t Hooft Lyseum, Leiden Univ. 訪問
9・7	金	Enaplan Elementary Carousel, Luidenss chool 訪問
9・8	土	アムステルダム市内社会教育施設 訪問 アムス→ニューカッスル
9・9	日	ダラム・ニューキャッスル市内社 会教育施設訪問
9・10	月	ダラム分校 研修
9・11	火	Durham Johnston School、Durham School 訪問
9・12	水	ダラム分校→ニューカッスル→ア ムス→成田
9・13	木	帰国

### 3. オランダの概要

今年3月まで帝京ロンドン学園へ出向していた筆者にとってオランダの現地校を訪問することは初めての経験であった。そこで、事前にオランダの歴史や政治経済の状況について調べてみると実に興味ある出来事が多く、それらが現在のオランダの教育制度に反映していることを実感した。

最初にオランダといえば風車を連想するが、オランダ (ネーデルランド 低地の意味) は現在でも国土の約3割が海面より低く、国土の2割以上は13世紀以降の干拓事業によって人工的に造られた土地である。つまり海水を汲み出して土地を干上がらせるための動力として風車が利用され始めたのであり、オランダの国土は自分たちの自力によって造り出されたものとの意識が明確で、治水事業の特性としてお互いに意思疎通を大切にするという国民性が、1960年代以降のオランダにおけるオルタナティブ教育の広がりを象徴しているのではと思った。

また、風が強いオランダでは16世紀頃から風車の改良によって羊毛の圧縮など様々な工業の動力となり、それがオランダの貿易の急速な発達をもたらした、船舶技術も向上したので風車の技術進歩は海洋

帝国オランダを支える要因となったといわれている。

周知の様に日本との関係といえば、オランダは江戸時代初期のいわゆる「鎖国」において唯一西洋諸国の中で貿易を幕府から許された国であり、世界最初の株式会社といわれている東インド会社を生み出したプロテスタントの国でもある。

そして、江戸時代後期にはオランダ人医師であったシーボルトが長崎に鳴滝塾を開いて優秀な蘭学者を輩出したが、彼が本国へ帰国の際に当時国禁であった日本地図を持ち出して大きな事件となったことも中学校歴史教書に記載されている。ちなみに彼は帰国後、ライデンに住んで『日本 (Nippon)』を執筆したこともあったので日本学科が世界で初めて設置 (1855年) されたのはライデン大学 (設立1575年) であり、今回訪問することができたことは私たちにとって非常に貴重な経験であった。

また、今回視察したアムステルダム国立美術館には世界三大絵画 (他はレオナルド・ダ・ヴィンチの「モナ・リザ」、ベラスケスの「ラス・メニーナス」といわれている。) の一つとされているレンブラントの「夜警」が展示されているが、その絵の主題はアムステルダム市民が自警団を結成してスペインから町を守るというものであり、まさにオランダの国のルーツを象徴するものである。

なお、世界経済フォーラム (WEF) が発表した2018年版「世界競争力報告」によると、総合順位1位はアメリカ、日本は5位、オランダは6位、イギリスは8位との結果であった。オランダは世界に先駆けて同一労働同一賃金制度を導入してワークシェアリングを実現させ、同性婚や安楽死を認めるなど人権の面で最も進んだ国でありながら国際競争力もランキン上位国であることにあらためて敬意を表したい。また、フェアトレードが最も盛んな国の一つでもあるので、今後はオランダのシチズンシップ教育についても実地調査をおこなってみたい。

#### 4. イギリスの概要

オランダは17世紀から18世紀にかけて海洋帝国となったが、その後、19世紀末から第一次世界大戦まで世界のリーダとなった国がイギリスである。

特に第二次世界大戦以降、「ゆりかごから墓場まで」という労働党が掲げたスローガンが象徴する様にイギリスは社会福祉国家となったが膨大な財政支出をもたらし、「英国病」と揶揄されるようになっての「大英帝国」は衰退の一途をたどった。

そこでイギリス初の女性首相（在任：1979年－1990年）となったサッチャー首相は「大きな政府」から「小さな政府」を目指す新自由主義にもとづく経済政策を実施した。サッチャー首相退任後からメージャー首相までの合計18年間にわたる保守党政権は教育への市場原理導入、そしてナショナル・カリキュラムの導入という学校教育への国家の介入もおこなった。これらの政策は1988年教育改革法（Education Reform Act 1988）によって法制化され、それを監視する役割として1992年に教育水準局（Office for Standards in Education：Ofsted）が設置された。

筆者が帝京ロンドン学園に管理職として出向（2016年4月から2018年3月）中、一番印象に残っている出来事はISI（Independent Schools Inspectorate 私立学校審査機関）による厳しい監査であった。なお、帝京ロンドン学園はボーディング・スクールなので2017年2月に実施された監査はOfstedではなくISIが担当することになった。もしその監査に合格しなければ最悪の場合、学校運営が出来なくなるという日本にはない厳しい制度で、しかも査察の訪問はその前日に突然知らされるとのことで、査察が予想される時期になると戦々恐々の日々を過ごしていた。幸いにも審査はパスしたが、筆者自身にとって貴重な体験であった。

結局、学校への国家の介入を出来るだけ控えて教育現場の自主性を尊重するオランダと対照的な教育システムを採用している国がイギリスであり、この2カ国を視察出来たことが今回の研修の特徴であったといえる。ゆえに、今回Durham Johnston School（公立の中等教育学校）を視察した際、教頭

先生はオックスフォードやケンブリッジ、そしてダラム大学などの有名大学への合格者数が多いことを誇っていたことが印象的であった。

一方、日本とは異なり完全に国からの財政的支援を受けていないので年間約700万円以上の学費（寮費も含む）が必要だが、国からの介入を受けずに伝統的な紳士教育を実践しているイギリスのパブリックスクールの一つDurham Schoolを視察することが出来たことも貴重な経験であった。

#### 5. おわりに

今回の海外研修、特にオランダの学校を訪問した際に多くの参加者から「日本と比較して学校の教員が生き生きしてカッコいい」という感想を聞いた。オランダの学校（イギリスも同じだが）では、休み時間に教員どうしがコーヒーや紅茶を飲みながら気軽にコミュニケーションをとっていることをよく目にした。また、教員は授業に集中し、しかも仕事と家庭の両立が可能になるような勤務環境が整っていることを教員へのインタビューから参加者は知ることが出来た。

そこで現職派遣のSLコースの院生には、今回の研修を契機に管理職候補として職場の教員どうしのコミュニケーションをどのような方法で密にして良い職場づくりをすべきかということ、そして働き方改革が日本でも課題となっているが、教員自身が仕事と家庭を両立できて前向きな教員生活を持続的におこない、人間として生き生きとした姿を後輩の教員や児童生徒に示すことができるような管理職を目指して欲しい。

また、学部から進学したSMコースの院生には教材づくりの視点、例えば日本の身近な素材から世界を意識するような「多角的で多面的」そして人権的な視点を養い、即役立つだけでなく今後の長い教員生活を送る上で肥やしとなりうる「多様性」「寛容性」の見方を児童生徒に持つ契機となってくれればと思う。



## 見回すと新しい“教材が見つかり、つながってきた” —海外での学校教育実地研究から—

三 石 初 雄

帝京大学大学院教職研究科

オランダ訪問は初めてで、いくつか見ておきたいことがあった。それは国土を倍化し、自然を“わがもの”とするのではなく、様々な恩恵を導き出し、持続可能性を追求している文化・環境を見てみたい、というかそれが自分の固定観念なのかを確かめたいということだった。

### 〈オランダ風車のイメージの塗り替え

#### — Paint mill gave life color —

風車といえば、「粉を引き、低地の水をくみ上げて、大地を創り出す」というイメージだった。今回、実際に私が見学したアムステルダム・ザーン川の風車（デ・カットという愛称）には30以上の機能があり、大麦、米、食用油（搾油）、タバコ、麻そして紙、木等の裁断加工のための動力源として用いられていたという。この風車があるザーン川沿岸には1000基（約20基現存）の風車が設置され粉ひきは一つの機能であって、産業革命までは多様な役割を担っていたとビデオ解説されていた。風車の中に入って不思議に思ったのは左下図の桶とカッター

の写真である。風車の中では、これは何に使っていたのか。

実は、この染料製造用風車（Paint mill）がオランダの画家・ゴッホとフェルメールらの画風・色調に関係あることが見えてきた。風車では、植物を細かく裁断して染料のもとをつくるだけでなく、岩石を砕いて顔料（絵具）もつくっていた。この桶の中に金属物質を多く含む岩石を入れ、上からカッターでたたき割り、小さくなった石を臼で挽いて顔料の粉末をつくる。植物染料では鮮やかな色彩が出ない、曇天も多い北欧の地での鮮やかな色調を可能とした顔料がここでつくられていた。デ・カットという愛称、そして風車の中に顔料の見本展示、ゴッホの黄色やフェルメールの濃紺の意味を改めて理解できた。鮮明な黄色や青の色には、このような干拓器械として導入された風車が、大型化・多能化して産業革命以前の動力源として用いられ、木材裁断や地域の食料、染料・顔料加工に用いられていることを目の当たりにして、よりザーン地域の産業、経済、文化、生活とが関連しあっていたことを連想することができた。



（ゴッホの絵と絵の具）

これらのことに関連して、今回、ニューカッスルの科学博物館でイギリスの産業革命当時の展示物を見て、それ以前の農業中心社会の時期においても、かなりの農耕、土木、木工と石工、金工技術の蓄積があったことを具体的に再確認でき、近代学校との接続との関係をより具体的にすることができた。15トンもある風車を支え、金属ではなく木材での張り合わせや継ぎ手、歯車やテコ、回転軸等を何重にも重ね、同時に多様な仕事をこなせる建造物を作り上げる文化をもっていた。近代の学校が、中世の時代からあった寺院や修道院に付属（限定）した教育機関としてではなく、学習内容も読み・書き・計算だけではなく、産業化社会に必要な窮理（物理）・化学・生理や地理・歴史と修身・道徳という科目を増設することの必然性ともいえる背景を知ることができた。

## 〈オランダと江戸時代

### — その新しい窓を開ける —

ところで、オランダといえば、長崎・出島を介したドイツ医学・技術のオランダ経由の文化の授受に限らず、大航海時代とアムステルダム&東インド会社の関係、シーボルトと地図持ち出し事件、海外初の日本学科創設とライデン大学、『解体新書』（1774）と杉田玄白とのことが連なってでてくる。今回の実地研究では、高野長英らを育てたシーボルトにちなむライデン大学も訪問することができ、2人の教授によるワークショップを体験し、院生が英語で臨んでいた姿はたくましさを感じた。

『解体新書』等の医学・医術の伝搬では、杉田玄白や前野良沢、前野玄沢らの訳出によるオランダ経由の蘭方医学といわれているが、その後、外科に限らず内科に関する訳出書も、宇田川家一族が手がけてきているという（磯崎康彦『医範提綱』と『医範提綱内象銅版画図 一わが国最初の銅版画解剖図一』、『福島大学人間発達文化学類論集』第15号2012）。そこには、腓臓の腓という訳出をあてるには、「過去分詞オブヘーホプト（opgehoopt）が「集められた」という意味から、「翠」（あつまる）の字をあて、フレース（vleesch）が肉という意味から

月（肉）偏とした、という訳出の苦労話も紹介されている。ここでは、それまでの木版印刷ではなく、銅板印刷による図書刊行技術の初出とも重なっていて、当時の状況を授業で伝える時のエピソード・教材になるかもしれない。

この点で、フェルメールが1660-70年代に「窓辺で手紙を読む女」「地理学者」「天文学者」を描いているのは、当時の女性社会に文字修得文化が入ってきている事や、世界・海を往き来する大航海時代（オランダ東インド会社（1602-1799））の一場面を抜き出していることが、私には重なって見えた。オランダの同時代史の理解と日本の鎖国と蘭学とのダイナミックな関係を、現地での実地研究ならではの文化理解とその教育的価値の再認識をさせられた濃密な機会となった。

また、もう一つの新しい研究としては、「オランダから江戸幕府交換への贈り物リスト」について、本学経済学部野澤丈二氏の紹介がある（本学の「第一回帝京大学研究交流シンポジウム」（2018.12.25）でのポスターセッション、「オランダから江戸幕府交換への贈り物リストのデータベース化：17・18世紀の会計帳史料を用いたデジタル人文学の試み」）。野澤氏は、100年以上にわたる当時の「会計帳簿史料」を用いて、贈物の品目、価格、分量、受領者（数）、役職などの情報が照会できるという。この資料が、データベース化されると、当時のオランダと日本との物的交流の内容がより具体的に見えてくるのではないだろうか。

教材研究は、学習者に適切な学習内容を典型的に内包する、教材を創出することにある。学習内容を学習者向けにどう翻訳・翻案するか、その検証をどうするかである。学習者にとって、学習内容の本質的に迫り得て、対話的学習活動を促す教材・題材・場面をどう生み出すか、それが教師の専門職性にかかってくる。それは、教科書に書いてあるゴシック文字をうまく教えることに終わらない。目の前の児童・生徒らにふさわしい“翻訳・翻案”に、教師が正面から取り組むことから生まれる。今回の実地研究では、新たな教材が見つかり、新たな学習活動創出への契機が豊富に見いだせた貴重な機会となった。

## 【MONTESSORISCHOOL APOLLO 公立小学校】

### モンテッソーリー教育の小学校

中村 理依子 (帝京大学大学院教職研究科 スクール・リーダーコース)

直井 仁美 (帝京大学大学院教職研究科 教育実践高度化コース)

#### 1 学校基本情報

学校名: MONTESSORISCHOOL APOLLO

所在地: Strausspad 3, 2324 BG Leiden

校長名: Antoinette Poldervaart

学校の特色:

公立の小学校 マリア・モンテッソーリーの教育と教育の原則に従っている公立小学校である。オランダのモンテッソーリーの協会(NMV)に認められている。

児童数: 60人 (8グループに分けられている)

教職員数: 正規の教員数8人 講師4人

授業時間: 月火木金 8:20～14:30

水 8:20～12:00

学校のビジョン:

マリア・モンテッソーリーは「子どもは生まれながらにして、自分自身を成長させ、発達させる力をもっている。したがって保護者や教師といった大人は、子どもの成長をくみ取らなければならない。子どもの自由を保証し、自発的な活動を助ける役割を果たすべきだ」と述べている。この考え方にもとづいて、責任感と思いやりをもった自立的な人間、一生を通じて学び続ける姿勢をもった人間を育てること。

#### 2 訪問調査の記録

##### (1) 学校・児童の様子

マリア・モンテッソーリーの教育と教育の原則に従っている教育がどの教室でも行われていた。マリア・モンテッソーリーは、イタリアのアンコナ州生まれの医師である。モンテッソーリー教育は、「教師(大人)の価値観で一方的に教え込もうとするのではなく、子どもの興味や発達段階を正しく理解し、子どもが触ってみたい、やってみたいと思う環境を適切に用意し、その環境と子どもを「提示」などによって結びつけ、子どもの自発的活動を促す。子ども

もは、自分で選んだ活動に満足いくまで繰り返し取り組みながら様々な能力を獲得していく。」こととある。

教室の全てにモンテッソーリーの教育の教材があった。学習形態は、机を4つ合わせたグループ机にしたり椅子をサークルにしたりして話し合い活動などをしていた。児童は、私服で好きなバックパックで通学していた。どの学級も静かで学習に集中している様子が伺えた。

見学した日は、生憎の雨だった。しかし、外遊びの時間になると子どもたちは、外用の服や靴に履き替え、並んで教室を出た。教師は、雨が降っていることは知っていたが、子ども自身にどうするか決めさせるためにあえて遊ぶ準備をさせ、雨が降っていることが分かる場所まで来た。子どもたちは、雨が降っていることに気づき、教師がどうするか尋ねる。子どもたちは「傘をさせば?」「フードをかぶれば大丈夫だよ。」といろいろな意見を伝えていた。教師「やっぱり残念だけど?」と。内遊びになった。

子どもたちは残念そうな表情をしていたが、自分たちで教室に戻ることを選択し、子どもたちの自主性を大切にしている場面だった。また、校庭に出る時に先生の歌声に合わせて児童が、雨の歌を歌っているのが素敵だった。生活の中で自然に気持ちや天気を歌にして表現していた。

##### (2) 施設の様子

外観は、窓の色が様々な色で塗られていて2階建てのかわいらしい学校だった。正門を抜けて正面に校庭が広がっていた。大きな家のお庭のような雰囲気である。雨の日でも遊べる卓球台もあった。

校舎全体は大きなお家のようなだった。

##### (3) 学習の様子

私達は、二つのグループに分かれ見学させていた



だいた。案内してくださった方は、校長先生と日本語教師をしていたこともあるオランダの先生、お子さんがこの小学校に通っている日本人の保護者の方に説明していただいた。

## ①自分で時間割を作成

1週間の始めに自分で時間割を作成する。課題は一人一人違って、課題が終わったら図1のように色を塗って進めていた。進行状況がよく分かる。先生も、一人一人の学習状況を把握していた。

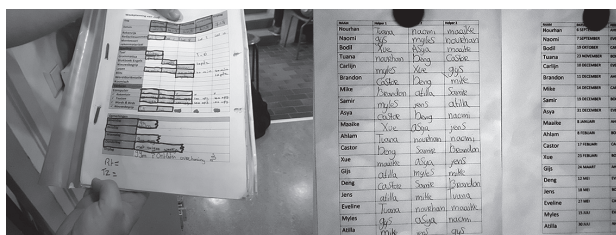


図1 個人の時間割表と一人一人の課題表

## ②学習環境・教材

低学年の教室を見学した。先生は、教室全体を見ていた。子どもたちは、集中して行っていて私語をしている様子はなかった。

子どもたちは、学習環境を自分で選択していた。課題もそれぞれ違い（教科も異なる）、学習する場所も一人一人違った。例えば、廊下で学習している子、教室の隅で学習している子、トイレに行っている子、様々で先生に「自分の居場所をカード」で示し学校生活を送っていた。



図2 教室の隅にある読書スペースと自分の居場所を示すカード

## ③充実した教材

モンテッソーリーの教育の教材が充実している。例えば、掛け算の学習では、そろばんのような物やカード、ブロックなど多種多様な教材が綺麗に整理

整頓されていた。いろいろな学習方法で学んでいく。子どもたちが自ら進んで学習したくなるような環境である。



図3 算数の教材

## ④先生の指示の声が小さい

先生が子どもたちに話しかける声がとても小さかった。日本の小学校にある声の表でいうと1ぐらいだ。児童も大きな声で騒いでいる子は、誰もいない。休み時間の教室移動でも私語をせずに静かに歩いて移動していた。その理由を学校の方に聞くと、廊下などで学習している子もいるので静かに過ごすように声かけをしているとの答えだった。全体的に静かに学校生活が送られていて見学している私達もが癒される時間となった。

## ⑤給食

一日6回フルーツブレイクと呼ばれる時間が設定されている。朝、自宅から果物と飲み物を持参する。りんごやオレンジが多かったように見えた。しかし、飲み物は、オレンジジュースなどでも良いとなっているので日本の保護者の方が、日本みたいにお茶や水で統一できたら良いかと教えてくれた。

## ⑥おわりに

小学校の時から個を大切に生活していることがとても羨ましかった。モンテッソーリー教育を受けた人の多くは、自分の考えをしっかりとち、自分を信じる力が大きいと感じた。日本の子供たちも自分で考え行動できるように支援していきたい。そのためには、日常生活から学習環境の工夫や支援の仕方が大切だと感じた。



【Visser,t Hooft Lyceum】

バイリンガル教育を推進するオランダのスクール

青山 直樹 (帝京大学大学院教職研究科 スクール・リーダーコース)

佐々木 祐 (帝京大学大学院教職研究科 教育実践高度化コース)

1 学校基本情報

学校名: Visserr,t Hooft Lyseum

所在地: Kagerstraat 1, 2334 CP Leiden

案内人: Remme Vander Nat & Jop Hoek Stra

生徒の人数: 1360 人

生徒の年齢: 13 歳～18 歳までの6年生の教育  
ークラス 30 人

学校の特色:

ダッチエデュケーションシステムの HAVO、  
MABO,VWO (職業教育、高等教育、高等進学  
教育と13歳の準備教育)を提供している学校

学校の教育目標:

1 国際教育・ヨーロッパと国際オリエンテー  
ションに注意を払い、ヨーロッパ内外での交流  
を行います。2 強固な指導・各年度の指導者と  
一緒に積極的なグループ形成を行いお互いを見  
て安全な学校環境を提供します。3 調整学習・  
初年度から、私たちは「生涯学習」に終点を充  
てたスキルを養成し将来的にあなたの開発に取り  
組むことを追及します。(学校 HP より)

時間割: 8:30 始業 15:30 終業 60分授業

所属の協会:

SCOL 協会 (ライデンには8校の中高があり、  
23校の小学校がある。)

2 訪問調査の記録

教員はミーティングルームというソファとカ  
フェコーナーがある開放的な部屋があり、そこで準  
備や教員同士の連絡等のやりとりをリラックスして  
行っていた。設立当時はカトリックの施設者した開  
校したのでカトリック教育が進行していたがいまは  
その性質もなく普通教育がなされている、校舎内の  
いたるところに当時を物語るキリストのモニュメン  
トなどが点在されている。生徒たちは制服を着用し  
ている。すべての授業が授業ごとに生徒たちがクラ  
スを移動して授業を受けていた。案内をしていただ  
いたレーメン先生はこの学校の英語の先生であり、  
国際部の責任者であり、5人の学校マネジメントを  
務める一人である。オランダでは親と子供が相談を  
して学校を選ぶことができる、そのため生徒を集め  
るために各校の競争があり、それぞれに特色をだし  
て生徒を集めることが必死になるそう。スポーツ  
を売りにする学校やサイエンスや語学を売りにする  
学校があるそう。今年は1360人の生徒が集まり  
満員の状態であるということだ。よって教室が不十  
分で場合によっては特別教室なども使わないと授業  
が追いつかないこともある。

3 教育課題

オランダでは12歳になると試験を受ける。その  
成績によって HAVO,MABO,VWO という職業教育  
と普通教育、ハイクラスの授業を選択しなければなら  
ない。12歳という若さで将来について選択を  
するということにつながる。そのためにこの学校で  
は1年間だけお試し期間 (ブリッジ教育期間) が提  
供されている。クラスでは時間割によって生徒が学  
んでいるが、一斉授業ではなく、科目ごとにそれぞ  
れの進度に合わせて小グループで進められている。  
生徒は空き時間に学習室や PC 室で課題解決をして  
いた。訪問日も数人の生徒が自習をしていた。時間



図1 Visserr,t Hooft Lyseum 正面玄関

割は一定に空き時間を作らずに設定をしたいらしいが、どうしてもクラスによって空き時間ができてしまうのが学校としての悩みのようだ。この学校では生徒たちの図書離れが課題となっているということだ、そこで教科ごとに一冊は図書を読むということにしている。そして先生たちは生徒が選びそうな図書を用意しておいて、新人の先生はそれを使うようになるということであった。今年からは 60 分授業に切り替えた。その分 1 日のレッスンが少なくなったことで生徒が学びやすくなったと伝えられた。



図 2 校舎内の様子

#### 4 特色ある教育活動

シアタールームがあり客席 100 名程度の本格的な特別教室があった。ドラマという科目があり演劇を中心とした学びを行っている。单元例としてごみ問題を題材に量を減らすことについてアイデアを出し取組むような内容を展開しているそうだ。シアタールームを持っているのもこの学校の特徴であり売りの 1 つになっている。照明、サウンド等に興味を持つ生徒も多く興味を持った生徒に関しては授業でも触れられるようにしている。

この学校はバイリンガル教育を推進し、HAVO と VWO で展開をしている。1～5 年生までに 50% の生徒の英語の習得を目指している。さらに 6 年生になるまでにフランス語、スペイン語、中国語、ドイツ語の習得もできるシステムを展開している。

#### 特別支援教育について

特別支援教育の先生だけを集めた部屋があり、その隣の部屋では生徒がいつでも相談をできる部屋になっている。この学校の特別支援の考え方として、子どもにとってベストな解決方法をコーディネーター、担任、生徒、保護者と一緒に考えて決める。もし校内で解決できなければ、外部から専門的な人を呼び本人にあった支援を考えるという。在校中は外部機関などに関わることも全て無料。オランダ教育システムの VWO にアスペルガー障害の子が多く HAVO と MAVO の中間に ADHD や ADD の生徒が多く存在しているという。

#### 5 教員の勤務形態

フルタイム勤務とパート勤務の働き方があり、それぞれ福利や待遇で差はなく単純に時間数の違いのようだ。フルタイムは 36 時間、そのうち 28 時間は授業で 8 時間は準備時間という話である。パート勤務の教員は子育て中の方が多くほとんどが女性の教員。夏休みと冬休みがありその期間に教員は休んでリフレッシュを行うということであるが、始業前は準備をしに学校に来るということ。他にバカンスのお金（日本でいう期末手当）が収入の 8% をもらえるということだ。オランダの先生たちは基本的に服装が自由となっている。その中にあって学校組織で責任を持たせている教員には個室が与えられている。

#### 6 まとめ

学校訪問において、一番衝撃的だったことはオランダの教育の在り方である。オランダの良き文化である「寛容さ」は、今回訪れた Visser' t Hooft Lyceum でも感じる事ができた。教師と生徒が一体となり、1 つの授業を作り上げるオランダの授業風景は日本も見習わなければならないと強く感じさせた。また、日本の 2 歩先に行く特別支援の在り方にも感銘を受けた。教師とコーディネーターによる密な連携は、我が国の未来を担う若者にとって必要不可欠な支援である。見てきたすべてが糧とできるわけではないが、少なくとも現在の日本教育に、この「寛容さ」が必要なことではないかと思う。より良い教育を目指すうえで生徒と教師が共に寄り添う姿は、見習わなければならないと感じた。

【Leiden Univ.】

## オランダ最古の国立大学

坂内 啓太郎 (帝京大学大学院教職研究科 教育実践高度化コース)

### 1 学校基本情報

学校名: Leiden Univ.

所在地: Rapenburg 70 2311 EZ Leiden

案内人: Daan & Romein

生徒数: 約 25800 人 (2015 年度)

教職数: 約 5500 人 (2015 年度)

### 2 オランダの教育制度

オランダの高等教育機関は、研究大学 (WO) と高等職業教育機関 (HBO) の2つからなる。両者とも卒業すれば、学士の学位を取得することができるが、入学年齢と卒業年齢が異なる。WO は 19 歳入学で 3 年間、HBO は 18 歳入学で 4 年間である。この差異は、中等教育機関における教育課程に起因するものである。オランダの初等教育では、5 ~ 12 歳の 8 年間であるが、12 歳 (group8) の最高学年時に、全国一斉試験が行われる。この試験結果に基づいて、次年度以降の中等教育の進学先が決められているようだ。そして、WO に進学を希望する生徒は、VWO に 6 年間進学し、HBO に進学を希望する生徒は、HAVO に 5 年間進学するのである。一見、中等教育と高等教育が一直線上にあるようにみえる教育制度だが、一旦 VWO や HAVO に進学しても、途中で進路変更が可能であるようだ。この他に、MBO と呼ばれる職業教育機関があり、これに付随して VMBO という中等教育機関が設けられている。



図1 ライデン大学外観

### 3 ライデン大学について

オランダには、ライデン大学を含む 13 の公立大学と私立大学 (WO)、40 以上の HBO が存在する。公立大学が 13 校しかないというのは、日本と比較してみると、少なく倍率も高そうな印象を受ける。秋富 (2017) によると、オランダでは高等教育の進学率が日本に比べて著しく低いようで、「オランダでは高等教育機関、特に WO に進学するのは、依然として少数の「エリート」であると言えよう。」と述べている。また、オランダの大学には入学試験が無いいため、各大学が特色ある教育課程を編成しており、学生が選択し受験する形となっている。

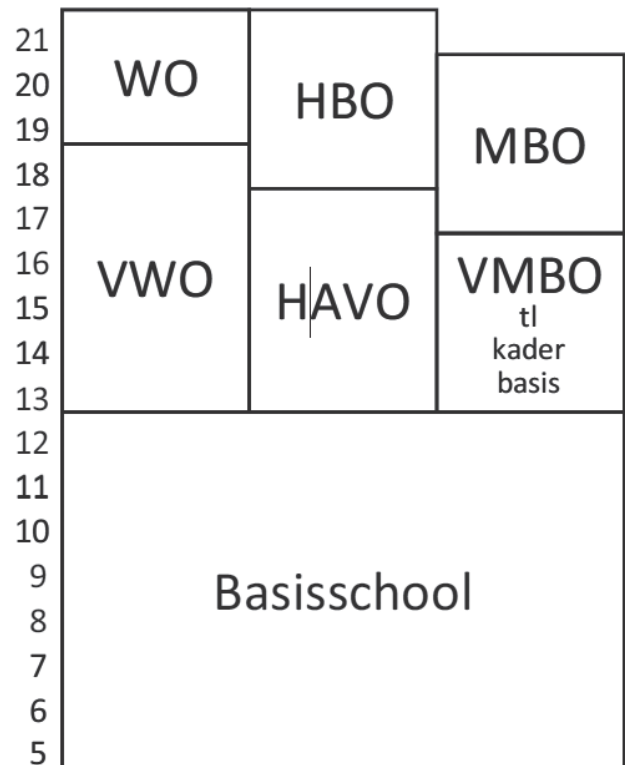


図2 オランダの教育制度 秋富 (2017) より抜粋

私達が訪れたライデン大学はオランダ最古の国立大学である。ライデン大学には、「考古学 (Archaeology)」・「法学 (Law)」・「医学 (Medicine)」・「自然科学 (Science)」・「行政及びグローバル事情



学 (Government and Global Affairs)・「人文学 (Humanities)・「行動科学 (Social and Behavioural Science)」の 7 つの学部が存在する。

このうち、世界的な言語や文化・社会を研究する「人文学部」には、日本学科が存在する。この日本学科は、1855 年に世界で初めて設立された日本学科である。設立された背景としては、江戸時代に活躍した博物学者であるシーボルトと日本との関係性が考えられる。秋富 (2017) によると、シーボルト事件で日本を追放されたシーボルトはライデンに居住し、その弟子となったヨハン・ヨーゼフ・ホフマンが初代の日本語担当教授を務めていたそうだ。ホフマンはオランダに留学した西周や津田真道の師となった人物で、津田は留学で得た学びを、『泰西国法論』と題して訳出し、日本初の西洋法学の紹介書として注目されることとなった。

ライデンと日本の繋がりや、町並みのビルの壁面に描かれた「荒海や佐渡によこたふ天の川」や「東風吹かば匂ひおこせよ梅の花 あるじなしとて春を忘るな」といった文字からも、感じる事ができた。また「行動科学」では、研究題目の 1 つとして「教育と子供研究」が掲げられており、「臨床の神経発生的科学」・「教育的な科学」・「学習での行動問題」等が研究されているようである。



図 3 ディベート活動の様子

#### 4 ライデン大学でのディベート活動

ライデン大学訪問では、Daan・Romein の 2 氏が迎えてくださった。訪問内容としては、「オランダ

と日本の教育で一番異なること」・「オランダと日本の教育で一番類似していること」という 2 つのテーマでディベート活動を行った。ディベート活動の流れとしては、個人で 2 つのテーマについて考えを持った後に、2 人 1 組・4 人 1 組と徐々に人数を増やしていき、最後は全員でディベート活動を行うというものであった。ディベート活動を通して、訪問した Montessori School Apollo や Visserr,t Hooft Lyseum、日本の教育現場を思い返すことができ、私達自身が海外学校教育実地研究で感じた事象を見つめ直すことができた。また、ディベートする人数が徐々に増えていく展開であったため、全員でのディベートとなっても気負いもせずに、活発に議論を展開することができたように思う。

最後に、ディスカッションを通して、私が考えたことを述べて、まとめとしたい。2 つの国の教育で一番異なることは、教育制度の差異に起因する生徒の学習への取り組み方であると感じた。オランダでは、12 歳の年齢時に、将来の進路に繋がる全国一斉試験が実施される。つまり、オランダの子どもたちは、自身の将来を選択する状況に、12 歳で立たされているのである。私が小学校の頃や、実習校で交流がある中学生の様子と比較してみると、この事実は衝撃的であった。また訪問した学校では、子どもたちが自らの学習のスケジュールを管理している場面も多く見ることができ、初等教育機関の頃から、自身のスケジュール管理や将来の見通しを立てるための指導も重視されているように感じた。

また、一番類似していると感じたことは、オランダでも、生徒主体のアクティブ・ラーニングが奨励されている点である。Daan・Romein 両氏の話の中で、アクティブ・ラーニングが話題に挙がり、教育制度や子どもの実態が異なっている、生徒主体の学びが必要であると捉えられていることが分かった。

#### 参考文献

「ライデン大学日本学科とオランダの教育制度」  
(秋富創「総合文化研究所年報」第 25 号、2017)

## 【De Carrousel Jenaplan Basisschool】

### イエナプラン教育の小学校

富樫 幸乃 (帝京大学大学院教職研究科 スクール・リーダーコース)

須賀 愛加 (帝京大学大学院教職研究科 教育実践高度化コース)

#### 1 学校基本情報

学校名: De Carrousel Jenaplan Basisschool

所在地: Scholenpad 2 2804 RW Gouda

校長名: Petra den Hollander

生徒数: 1クラス 28名

学校の特色:

イエナプラン教育の学校である。「バースデー」を大切に、教室に、子どもの誕生日を掲示している。この他に「褒める」ということを大切に、何か褒められることがあれば、掲示している。

また、子どもと教師の間に「信頼関係」が構築されていた。子どもたちが自分で考え、行動し、体験から学ぶということを大切にしている。それは、良い悪いどちらも体験をすることで得られる学びを子どもに分かってもらいたいということである。

#### 2 イエナプラン教育

De Carrousel Jenaplan Basisschool は公立学校であるが、オールタナティブ教育の一つであるイエナプラン教育を行っている。イエナプラン教育は、ドイツのイエナ大学の教育学教授だったペーター・ペーターゼン (Peter Petersen, 1884 - 1952 年) が 1924 年に同大学の実験校で創始した学校教育である。子どもたちを異年齢のグループにしてクラスを編制したことに大きな特徴がある。

オランダにおけるイエナプラン教育は、1950 年代にスース・フロイデンタールによって紹介された。以後、オランダの教育改革の潮流に乗り、急速に学校数が増加していった。現在、オランダ全国に、公立校・私立校をあわせ、220 校以上のイエナプラン小学校があり、これは発祥地ドイツを凌ぐものである。

イエナプラン校の特徴は、

- ①異年齢集団: 「子どもたちは一人一人とても異なっている」ということを前提に、だからこそ学び合えることがたくさんあると考え、「根幹グループ (英語ではファミリー・グループを訳されることが多い)」と呼ばれる異年齢集団を基本として学級が編成される。根幹グループを作ることによって、年少の子は年中へ、年中の子は年長へ、という風に、子どもたちの位置づけは毎年変化する。この複雑な学習のプロセスで、学級担任にあたるグループリーダーは子どもたち一人ひとりの個性や状態を把握しながら援助する。
- ②循環する活動・科目によらない時間割: 基本的に、(サークル) 対話－遊び－仕事 (学習)－催し (行事や祝い) という 4 つのパターンの活動を循環させる時間割を作る。
- ③ワールドオリエンテーション: 総合学習の形態の一つで、ワールドオリエンテーションについての考え方、教材、教育方法、カリキュラムは、オランダで特に大きく発達した。年間およそ 8～9 のテーマを決め、学校全体で同じテーマに取り組む。

#### 3 訪問調査の記録

##### (1) 施設と学習活動の様子

学校の概観は煉瓦造りで、煉瓦の壁の所々にカラフルなイラストが描かれている。入口には特に事務の受付はなく、女性の校長先生が出迎えて小さなキッチンをついた教師たちの休憩室のような部屋に通された。お茶とお菓子でおもてなしいただけると、8 人の子どもたちが私たちに学校案内をしてくれるために来てくれた。

2 グループに分かれて、子どもたちの説明を受けながら学校を見て回った。校舎内はとてもカラフルで、教室内や廊下に所狭しと教材や本、演劇に使うような小道具等が置かれている。衣装や小道具等は、



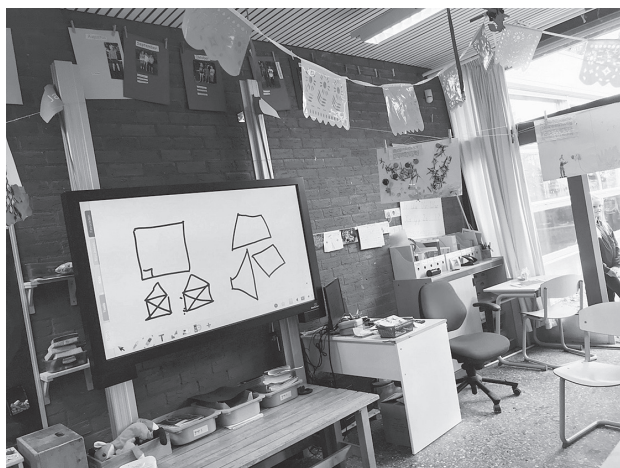


図1

比較的高学年の子どもたちが自分たちで相談して劇を作って演じるために用意されている。小さい子どもたちは自然に遊ぶことができるが、年齢が上がるにつれて、それが難しくなる。そこで、演劇という枠組みでテーマを設けているという。毎週金曜日に全校児童が集まって集会が行われ、そこでそれぞれの劇や学習の成果を発表する。「発表を嫌がる子どもには、どうするか。」という質問には、「無理強いはしない。でもほとんどの子どもが喜んで発表している。」とのことだった。各教室は、それぞれとても個性的に机等の配置や飾り付けがされていた。イエナプラン教育では、学級は「家族」、各教室は「リビングルーム」と考えられているため、担任（グループリーダー）を中心にその学級の子どもたちと話し合っ、配置や飾り付けを考えるとのことだった。同じ学級の子どもたちが、数名は担任の近くに集まって学習の説明を聞き、他の子どもたちはパソコンに向かってそれぞれ練習問題に取り組んだり、廊下で友だちと話し合いながら学習したり、みんな違ったことをしている。それぞれの年齢や学習の理解度に応じて、その週に達成すべき目標に向かって自分のペースで学習に取り組んでいた。

一歩校舎を出ると、小さな森のような庭があり、隠れ家になる小屋や丸くなって座れる木のベンチ等がある。そこで、子どもたちはたくさんの植物や生き物について学ぶということだった。このような環境は、定期的に保護者が学校にきて整備してくれるという。保護者が学校に積極的に関わっている様子

が感じられた。

学校の敷地の際を小川が流れているが、そこで釣り等をして遊ぶこともあるという。校長先生に「危険だと保護者から苦情はないか」と聞くと、「全くないわけではないが、危険なこともしてみないと自分で危険かそうでないかを判断して行動できるようにならない。だから、一緒に見守っていきましょう。」と保護者に話すと言われた。上記の森にも、危険と思われる箇所があり、校内でも4歳くらいと思われる子どもが金槌で釘を打っていた。雨の日には、外で泥だらけになって遊ぶこともあるといい、子どもたちが経験から感じ、学んでいることが伺われた。



図2

## (2) 子どもたちと教師の様子

この学校に限らず、オランダの学校訪問で印象的だったのは、教師があまり話さず、話すときには至近距離の相手にだけ聞こえるような穏やかな小さな声で話すことである。大きな声で指示を出すよりも、個別に対話し、子どもを一人の人間として尊重していることが感じられ、印象的だった。

今回イエナプラン学校で感じたことは、子どもたちの主体性である。日常から活発に行動していることから、私たちと関わるときも積極的に話そうとしてくれていた。「伝えたい」という思いが強く感じられた。学習に取り組んでいた子どもたち、遊んでいた子どもたちも、受け身でじっと座っているような様子の子どもは一人もおらず、どの子も主体的に自分のしたいことを選び、活動していた。このような子どもの姿が日本でも増えるように、子どもの活動を広げていきたいと感じた。



## [VINDINGRIJK]

### 子どもが自分の才能を見つけられる公立小学校

古川 明恵 (帝京大学大学院教職研究科 スクール・リーダーコース)

小松崎 智理 (帝京大学大学院教職研究科 教育実践高度化コース)

#### 1 学校基本情報

学校名: VINDINGRIJK

所在地: Heemraadslag 1 2805 DR Gouda

校長名: Jasper van der Beek

開校年: 2018年

日 課: 午前3時間半 午後は2時間半

その他: 時間割は、子どもと保護者が決める。

#### 2 学校経営方針

教育目標: 子どもの豊かな才能を探しながら、  
発見する。

経営方針: 3つの柱

##### (1) 安全、感謝、尊敬

誰に対しても平等に関わる。また、真剣に声を聞き、お互いの目を見て、すべての子どもが安全な学校だと感じられるように関わる。子どもたちが家庭で学校の話話すことを楽しむくらい、夢中で楽しめる学校を目指す。

##### (2) アクティブな問題解決的な学習

子どもたちは、積極的に自分の学習プロセスをもとに、学習問題に対する答えを探す。自分にとって重要なことを体験し、自分の才能を発見してのばす。

##### (3) 未来志向の教育

未来を予期し、子どもたちに創造的思考、共働、コンピューターの操作、問題の解決、自分を表現し伝えるなどの重要なスキルを育てる。子どもたちは自信を持って中等教育を始めることができる。

#### 3 特色ある取り組み

##### ○調査的学習 (問題解決的な学習)

子どもたちが積極的に学べるような学習環境をつくる。それが、調査的学習である。

子どもたちの好奇心を刺激し、自分自身の問いに対する答えを探し求めるような動機づけを行う。このことをきっかけに、子どもたちは自分の研究過程

を洞察する。そして、情報を検索して処理したり、研究に対して質問したりして、最終結果を提示することを学ぶ。

調査的学習過程は以下の通りである。

##### ①驚き

あるテーマ (教材) を提示され、子どもたちは好奇心をもつ。

##### ②調査

テーマについて調べ、プレゼンテーションを行う。これにより、疑問やアイデア、予測などの意見交換をし、互いに学び合う。

##### ③研究

子どもたちは、研究に見えるものや測定するもの、これに必要な材料や測定器具などを含め、計画を立てる。研究をする。

##### ④発表

研究の成果を発表する。質問し、共に学び合う。

#### 4 訪問調査の記録

##### (1) 学校説明

VINDIGRIJK は、ゴードのアチェルーリエンス地区にある小規模な公立小学校である。今年、開校したばかりの学校である。小規模ということを含みにし、教師と子どもたちが互いに信頼と尊敬を与え合うことによって、すべての子どもが自分の才能を見つけることができるようにしている。

また、小学校だけでなく同じ敷地内にプレイグループ (幼稚園) と BSO Viginrijk (放課後ケア) がある。

新学期には、共同作業を行い、コミュニケーションをもとに学習環境へ戻すことを行っている。

##### (2) 学校の様子

校舎は、外観はレンガ造りになっていた。内観は、日本の小学校ではあまりみられないカラフルな飾り

付けがされていた。玄関を入ると、吹き抜けの広間があった。柱の上の方には、風船がいくつも飾られていた。窓も、丸く切られたカラフルな画用紙が貼られていた。廊下には、共同作業で子供達が作成した作品が並んでいた。これらは、全て教職員で装飾を行うようだ。

各教室には、教室の前に電子黒板が設置されていた。子どもたちの机は電子黒板の方ではなく、4人ずつのグループの形で置かれていた。必ずしも机で学習しなくても良いルールで、教室の外で学習している子どもたちも見られた。



図1 装飾された窓

### (3) 授業の様子

#### ① ICT を活用した個に合った学習

参観した授業では、一人一台のタブレットを使って自分で学習を進めていた。一人一人の学力に合わせた問題を解いていく。その学習状況は4色（緑・黄色・オレンジ色・青色）で表されていた。そのことを教師も子どもも一目で分かるように、その状況が電子黒板に表示されていた。教師がそれを見て、支援が必要だと思った子どもにヒントを出すことができる。また、子ども自身も今の自分の



図2 ICT を活用した授業

の学習状況を把握でき、意欲向上へ繋がる。ただ、考えても分からない時は教師に質問をし、その都度教えてもらいながら自分で学習を進めている印象だった。周りの音が気になる子どもは、ヘッドホンをつけられようになっていた。

本校では、数学と言語はタブレットを活用した学習が毎日ある。タブレットを使うことで多くの学習に集中し、自分のレベルに合った学習が常にできる

のである。

#### ②生活体験ごっこを通した学習

プレイグループ(4歳～6歳)では、いくつかのグループに分けられ、グループごとに積み木や粘土、プログラミング学習、おままごとなどをしていた。自分が取り組む活動内容は教師から指示されるようだ。

これらの生活体験ごっこを通して、共に遊び、創造力を発揮し、遊びながらルールや新しい言葉など多くのことを学ぶことができる。例えば、おままごとでは、調理や皿洗いなどの方法を学ぶ。また、積み木で遊ぶ時は、仲良く遊ぶルールを学ぶのである。

#### (4) 体験学習（オランダ式のドッジボール）

貴校の体育の授業で子どもたちから人気の活動を体験した。日本のドッジボールに似ていた。ルールは、内野同士でパスをして投げる。そうすることで、決まった人が投げるものが減るようなルールだった。

## 5 まとめ

日本と貴校の学校教育を比較すると、共通点と相違点が見えてきた。

共通点は、子どもたちが家庭で学校の話話すことを楽しむくらい夢中で楽しめる学校を目指すこと。日本の教師も子どもたちが楽しく学校に通えるように様々な工夫を凝らしている。また、調皮的学習（問題解決的な学習）を取り入れていること。自分自身の人生を豊かなものにするためには、目の前の問題をどのように解決していくかというスキルが改めて必要であることを再確認できた。

相違点は、個に合った学習環境があること。一人一人の学力に合った学習ができることが一番印象的だった。また、新しい考えが大事にされていること。校長先生が30歳であることに驚いた。ただ、オランダでは「新鮮な風をどんどん入れること」を重点として置かれていることだから、30代で校長先生になることは稀ではないようだ。

貴校やオランダの学校教育の良さを日本の教育現場にも取り入れられることは生かしていきたい。

【Durham University】

## イギリスで第3に古い伝統ある大学

多田将大 (帝京大学大学院教職研究科 教育実践高度化コース)

### 1 学校基本情報

学校名: Durham University

所在地: ダラム州 ダラム市,

ストックトン・オン・ティーズ市

設立年: 1832 年

生徒数: 13,665 人 (学部生)

: 4,720 人 (大学院生)

### 2 ダラム大学について

ダラム大学 (Durham University) は、世界遺産のダラム城と大聖堂を有するダラムの街にあり、ケンブリッジ、オックスフォードに次ぎイギリスで第三に古い、伝統ある大学である。人文科学部、社会科学部、科学学部の3つの学部があり31の学科で構成されている。ダラム大学の研究水準・教育水準ともにイギリストップクラスの大学といっても過言ではないようで、最新の研究評価 (RAE) では、地理学や法学をはじめ33科目中20科目が5または5\* (5\*が最高) に評価され、教育評価においても86%の科目で24点満点中22点以上の評価を受けた。イギリス国内紙のランキングにおいても、常にトップ10にランクされ、その順位は年々上昇している。このようなことから、2005年度にはSunday Times誌のUniversity of the Yearに選ばれた。これは、その年の教育水準・研究水準、実績、施設の充実等を総合的に考慮して決定されるものである。

また、ダラム大学の魅力として学生生活の中心カレッジ制が採用されている。他の大学には見られない、ダラム大学のユニークな特徴として紹介されていた。学生は必ずいずれかのカレッジに所属し、ダラム大学の学生というよりもむしろ所属カレッジの学生というアイデンティティが学生生活の中心になる。カレッジは教育機関としての性格を有してはいないが、単に学生寮を組織する団体でもなく、ソーシャル・アクティビティ、スポーツなどカレッジ内の学生同士の活動を通して、ネットワークを広げる

手伝いをする働きがあり、仲間意識や協働性を大切にしている。現在、ダラム大学には16のカレッジがあるという。

### 3 訪問の様子

今回の海外学校教育実地研究において、ダラム大学はBill Bryson Libraryという図書館を訪問した。蔵書冊数は帝京大学八王子キャンパスにあるMELICが約780,000冊。それに比べ、ダラム大学のBill Bryson Library蔵書冊数は倍以上の約1,637,000冊あると紹介された。

設備等はMELICとあまり変わりがないように感じたが、プライベート空間はとても充実していて、机や椅子などのインテリアのデザイン性が高く、施設全体がスタイリッシュな印象であった。

また最も印象的であったことは、世界遺産であるダラムの大聖堂を眺めながら本が読めることである。



図1



図2



## 4 イギリス教育について

帝京大学ダラム分校にて須田英津子教授（ニューキャッスル大学英語科）からイギリス教育についての講話を聴くことができた。

### (1) 学校の種類

#### 【公立学校：State schools】

- ・ Community schools  
地方自治体が統括
- ・ Academies  
検査に落ちた低水準または優秀校が申請可
- ・ Free schools  
地方自治体の管理下に置かれていない半独立校
- ・ Grammar schools  
元々は旧教育制度から残った学校

#### 【私立学校：Independent schools】

全体の 7% の子が通い、エリートを輩出。

約 2,200 校ある

- ・ Preparatory schools  
Public schools への準備教育機関
- ・ Public schools  
中・上流階級の子弟を対象

### (2) 成績評価

表 1

Early Years	3 歳 - 5 歳	Nursery and Reception	
Key Stage 1	5 歳 - 7 歳	Yeas 1 and 2	
Key Stage 2	7 歳 - 11 歳	Yeas 3 - 6	SATs 11 歳
Key Stage 3	11 歳 - 14 歳	Yeas 7 - 9	
Key Stage 4	14 歳 - 16 歳	Yeas 10 - 11	GCSEs 16 歳

16 歳で義務教育終了→就職か進学

進学の場合は 6th Form で大学進学コース

17 歳 -18 歳 Year 12-13 GCE A levels →出願→大学

### (3) 18 歳までの教育のポイント

- ・ 地方や学校の種類によって、それぞれ独自の教育制度を設定している。
- ・ 義務教育終了時（16 歳）には、2 年間の GCSE コースを修了して、全国学力試験 GCSE を受験。
- ・ GCSE の結果から、さらに高等教育を目指すには 6th Form と呼ばれる 2 年間の A レベルコースへ。
- ・ イギリスの大学は、A レベルの試験結果を中心に合否を決定。

### (4) GCSE 課程

- ・ Year10・11（15 歳 -16 歳）の 2 年間。約 20 科目の中から、10 科目程度を選択。
- ・ 採点方法は、試験の点数。
- ・ 1 科目ごとに 1-9 までのグレードが付き、その成績が義務教育修了の証。

### (5) GCE・A 課程

- ・ 大学進学のためにはさらに 2 年間 GCE・A レベルの課程に進む。AS レベル 1 年→ A2 レベル 1 年
- ・ Year12・13（17 歳 -18 歳）で数科目受験し、成績は A～E が合格。大学での専攻を見据えて、必要な受験科目を自分で選ぶ。
- ・ A レベル受験が終わると、大学に出願する。

## 5 イギリス教育の特徴

### ① Topic learning / Thinking process 重視

内容を掘り下げ、思考過程を重視する。地理・歴史・英語などの学科領域をクロスする / 数学・科学を重視。

### ② Public Schools の存在

State schools の “Gifted and Talented Children” 他の同級生よりもかなり伸びる能力を持っている子ども。4 歳 ~19 歳を対象。全体の 5～10%

### ③ Home Education

学校教育以外の選択肢がある。子どもには、国の指導要領を学ぶ義務、国の統一試験を受ける義務はない。また、いつでも学校に戻れることも特徴である。

### ④ ‘Mature students’ And ‘Gap year’

学齢にこだわらない高等教育のこと。UK の学部生の 60% が 21 歳。高等教育の学生のうち 40% の学生はパートタイムか融通のきくコースに通う。また、1 年間勉学から離れ、視野を広め、新しいスキルを身につける制度がある。

## 参考資料

- ・ Durham University HP

## 【Durham Johnston Comprehensive School】

### 英国の公立中等学校

山地 雄斗 (帝京大学大学院教職研究科 教育実践高度化コース)

#### 1 学校基本情報

学校名: Durham Johnston Comprehensive school

所在地: Crossgate Moor, Durham DH1 4SU

校長名: Andrew O' Sullivan

生徒数: 1602 名

生徒の年齢: 11 ~ 18 歳までの 8 年教育

ークラスおよそ 30 名

標語: SAPERE AUDE (Dare to be wise 賢明になることを願う)



図1 開放的な外観

学校の特徴:

- ①アカデミックエクセレンス: 全ての若者に最高の教育を与えられるように、各教科ごとによりよい教師を用意し、学習を目的のための手段ではなく、学習そのものに価値を見出させる生涯教育。
- ②社会正義: 他者のニーズを理解し、人種的、宗教的な相違に寛容であり肯定的な敬意を育む。また、リーダーシップを発揮したり町へ参画する機会を積極的に作り、地域社会で生きていく力を育む。
- ③グローバルな未来: 学生が将来何かを追求する際に、カリキュラムや学習が世界規模で競えるものでなくてはそれは達成できない。そのため、言語の学習により国際理解や様々な機会の均等、コミュニティの結成等を行うことにより、達成しようとしている。

時間割: 08:45 始業 14:45 終業 60分授業

#### 2 訪問調査の記録

##### (1) 学校の様子

学校全体の雰囲気として、解放感に溢れるつくりになっていた。また、1階から最上階にかけて吹き抜けになっており、教室の天井も高いつくりであった。州においてトップクラスの優秀校ということで、閉塞感や息苦しさの様なものを感じるかと身構えてしまっていたが、外観から受けた印象そのままに、むしろ清々しい気持ちになる学校であった。また、シックスフォーム専用の設備がいくつかあったが、それに対して卑屈であるような様子は見受けられなかった。

##### (2) 授業の様子

日本の教育と大きく違うと感じたのは2点である。1つ目に、ほぼ全ての教室内前面中央にプロジェクターが掛かっており、その横にホワイトボードがあることである。見学させて頂いた2つの授業では、常にプロジェクターに何かを表示しつつ、ホワイトボードで基礎的なことや補足説明を行っていた。授業の進行自体は日本の一斉授業と大差はないように感じたが、生徒の学習意欲は高く維持されていた。2つ目は、各教科ごとに教室が決まっており、毎時間生徒が移動することである。



図2 教室案内

これは日本でいうところの大学に近いかもしれない。同じ教室で長時間勉強するよりも、定期的に気分を入れ替えることができるとともに、教室に向かう過程で勉強をするんだというような気持ちを作っていけると感じた。

### (3) 特色ある教育活動

多国籍国家ならではの充実した宗教教育（主にキリスト教、イスラム教中心）や第二言語、PSHE が必修となっている。毎週火曜には宿題サポートタイムがあり、普段の学習が遅れている生徒は極少人数レッスンが受けられ、非常に手厚いものになっている。差別をせず認め合うことの良さや、自分の将来設計の準備を中高生の段階で行っていく事は、間違いなく生徒にとって有意義に違いない。

## 3 まとめ

この度の学校訪問では、イギリスの教育と日本の教育の相違点に様々気付かされたものであった。中でも、学校の特色にもなっている、社会正義やグローバルな未来を掲げるだけでなく、実現可能なカリキュラムの実施まで既に行っていることに感銘を受けた。イギリスにおいても保護者対応やいじめに関する問題が出てきているとお話があった。その点においては日本の教育は一日の長があると思われるため、相互に情報交換をする中で、イギリス教育の特色を日本に落とし込める部分が無いか、またどのように落とし込むかを考察していきたい。



## 【Durham School】

### “Confidence” をモットーとするインディペンデントスクール

祐松 智紀 (帝京大学大学院教職研究科 教育実践高度化コース)

#### 1 学校基本情報

学校名: Durham School

所在地: Quarryheads Lane, Durham City, DH1 4SZ

校長名: Mr Kieran McLaughlin (MA)

設立年: 1414 年

生徒数: 526 名 (2018 年 1 月時点)

ハウス数: 5

- ・世界で 5 番目に古いラグビークラブがある
- ・A レベル試験に A\* - B の成績で合格した生徒の割合は 70% (2018 年)

HP: <http://www.durhamschool.co.uk/>



図 1 校内の概観

#### 2 学校のモットー

本学校のモットーは自信 (confidence) であり、自信をもつことで学校生活のいたるところで成功できるようになると教員たちは信じている。自信について、いくつかホームページで説明がなされていたので以下に箇条書きで記す。

- ・自信は、自分自身を理解することから生まれる。
- ・自信は正しいか間違っているかの正確な判断ができるセンスをもつことから生まれる。こうした自信をもつことで、利己的でない、正しい判断をすることができる。

- ・自信は準備から生まれる。試験やコンサートの前にしっかりと努力することで、落ち着いて本番を迎えることができる。

しかしこれらの説明の最後に、「これらの言葉をそのまま受け止めず、実際に学校に来て、自分の目で確かめて下さい。この学校はいつでも open day です。」と書かれていた。言葉だけで判断せず、自分の目で見たものを大切にして欲しいとの思いがこめられている。

#### 3 学校の特徴

##### (1) スポーツ

本学校ではスポーツを重要視しており、スポーツを、自信や健康、その他あらゆる面における成長に寄与するきわめて重要な要素として捉えている。

ハウス対抗のスポーツでは、プレーにハウスとしての誇りをかけて、チームとして一緒に戦っている。

イギリスはラグビー発祥の地であり、スポーツマンシップはイギリススポーツの形成と共に成長を遂げた精神であった。本校の校長に、「個人スポーツよりも集団スポーツに重きをおいていますか？」と質問をしたところ、「おっしゃるとおりです。」とご回答いただいた。

##### (2) パストラルケア

“If a child lives with encouragement, he learns to be confident” (もし子どもが、励ましを受けて生活することができたら、彼は自信をもてるようになる)

上記のような理念のもと、本学校では生徒のあらゆる面においてサポートするパストラルケア (pastoral care) のシステムを確立している。普段の生活のこと、友達関係のこと、将来のことなど、学業以外のことはすべて相談できる。本学校ではランチの時間をながめにとっており、その間に相談す

ることもできる。相談相手としては、大人だけでなく、チューターとして生徒が相談に乗ることもあるようである。

カウンセリングとの違いに関しては、カウンセリングは精神的な悩みの解決だけに特化しているが、パストラルケアはより一般的（more general）であり、生徒が幸せになるためのあらゆる面でのケアである。

### (3) 寮

本学校は全寮制ではないが、多くの生徒が寮で生活をしている。”The Houses are at the heart of pupils' lives”という言葉からもわかるように、寮は生徒の生活の中心である。寮にはハウスマスター（寮母さん）がいて様々なサポートをしてくれるが、寮生の中にもキャプテンがおり、下級生をあらゆる面で引っ張っている。ちなみに本学校では年に1回歌のコンテストがあるが、これはそうしたキャプテンを中心として、学生だけで企画から運営まですべて行うようである。

寮生は土日何をしているかというと、土曜日はスポーツに打ち込み、日曜日は町に出てショッピングをするなどして遊んでいるよう。

近くに家がある人はほとんど通いで学校に通っているが、たまの週末には寮に泊まったりすることもあるよう。

### (4) 宗教

学校はキリスト教の学校ではあるが、学生は全員がクリスチャンということではないようである。多国籍の生徒も多くおり、仏教徒やムスリムなど様々である。

しかし、集会の際は、全員チャペルには行く。

## 4 授業観察

今回は Six Form の Biology の授業を見学した。Six form は、大学入試で重要な A レベル試験のための勉強をする学年であり、A レベル試験は日本という大学レベルの内容であるため、授業の内容も非常に高度であった。見学していて、なんとか英語は分かるが、内容に関しては私の高校1年までの生物の知識では、筋肉の勉強をしていること以外全く理解ができなかった…。



図2 学生寮

## 【アムステルダム社会教育施設訪問】

### ザンセスハンス風車・アムステルダム国立美術館

柏木 志保 (帝京大学大学院教職研究科 教育実践高度化コース)

#### 1 社会教育施設基本情報

- 施設名 ①ザンセスハンス風車  
②アムステルダム国立美術館  
(Rijksmuseum)
- 所在地 ① Schansend 7 1509AW Zaandam  
② Museumstraat 1, 1071 CJ Amsterdam

#### 2 訪問調査の記録

##### (1) 施設の説明

##### ①ザンセスハンス風車



図1 ザンセスハンス風車

アムステルダムから車で30分、風車とチーズと木靴の街、「ザンセ・スカンス」。ザンセスハンス風車はオランダの北ホランド州にあるザンセ・スカンス周辺にあり、この地域では、伝統的な家屋、風車、鋳製品の工場、チーズやデイリーファーム、その他の工芸品を見ることができる。17世紀、ザンセ・スカンス周辺に600基以上の風車が建てられ、世界初の工業地帯となっていた。風車は特に香辛料の製粉、塗料の生産、材木の切断、油の製造に使用された。こうした風車の多くは今でも残っており、見学することができる。現在見学できる風車は、3機である。風車はオランダの象徴と言っても過言ではなく、全盛期には1,000基もの風車が稼働していたことから、オランダ人の生活になくてはならないものだったということがわかる。

また、ザンセスハンス風車の近くには、チーズ

工房やショップなどもある。オランダはチーズ輸出国としても世界トップクラスで、チーズショップでは、チーズ作りの工程や様々なフレーバーのチーズの試食、購入ができる。他にも木靴の工房やショップもあり、工房見学や木靴作りの見学や購入もできる。

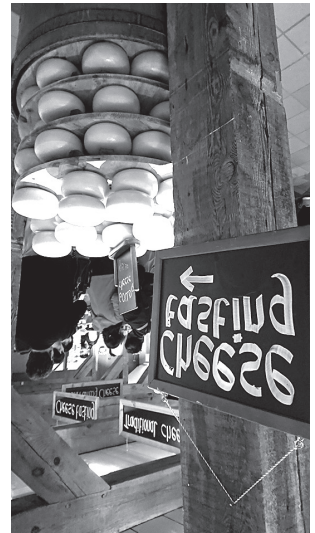


図2 チーズショップ

##### ②アムステルダム国立美術館 (Rijksmuseum)

開館時間：年中無休 9:00～17:00

入場料：大人 17.5ユーロ

子供 (19歳以下) 無料

日本語マルチメディアガイド 5ユーロ

アムステルダム国立美術館は、1800年にルブラン総督がデン・ハーグの宮殿で開催した展覧会前身で、当時の名称は「ナショナル・アート・ギャラリー」だった。1808年にナポレオン1世がアムステルダムへの移転を命じ、更に1885年に現在の場所に移された。2004年～2013年にかけて本館は大規模な修復工事が行われていたが、2013年にリニューアルオープンした。来館者数は年間200万人を超えるオランダ最大の美術館で、オランダの中世から現代までの芸術と歴史の宝庫である。レンブラントの「夜警」をはじめ、フェルメールの「牛乳を注ぐ女」、「手紙を読む青衣の女」、「恋文」、「小路」など4作品、黄金時代の暮らしがわかるドールハウス (最古のものは1676年製)、ティーセットや花瓶などのデルフト焼のアンティークなどを所蔵しており、美しい内装で知られるカイパーズ図書



室（Cuypersbibliotheek）はオランダ最大の美術史本の蔵書を誇る。8,000点もの展示物が80の展示室で、800年に渡るオランダの芸術と歴史を網羅している。



図3 アムステルダム国立美術館

## (2) 見学の様子

### ①ザンセスハンス風車

9月8日（土）、午前9時頃からザーンセ・スカンスのザンセスハンス風車を訪れた。ザーン川沿いにカラフルな風車が並ぶ光景は、まさにオランダのイメージそのものの風景である。ザーンセ・スカンス村には風車だけでなく、ザーン地方特有の家屋、伝統のチーズ工房や木靴工房といった施設があり、村全体が博物館のようになっているので、色々を見て回って楽しむことができる。村の中では羊やヤギなどが放し飼いにされており、自然豊かな風景と動物たちを見ることができる。村に一步足を踏み入ると、カラフルで可愛らしい建物がずらりと並び、都会のアムステルダムから15kmほどしか離れていない場所で、このような素敵な風景を眺められ、歴史を感じることもできた。

### ②アムステルダム国立美術館

ザーンセ・スカンスの見学の後、バスに乗り、午前11時頃からアムステルダム国立美術館を見学した。16世紀から17世紀にかけて、世界貿易で財をなしたオランダは黄金時代を迎え、文化・芸術に関しても最先端であった。特に17世紀にはレンブラントやフェルメールをはじめ多くの名匠を輩出した。アムステルダム国立美術館はそうしたオランダ画家を中心に、5,000点を超える多くのコレクションを有し、一日たっぷりとした美の世界を楽しむことが

できる。また、美術作品だけでなく、美しい内装で知られる「名誉の間」や「カイパーズ図書館」など、素敵な建物も目を引いた。今回は2時間程度と短い所要時間であったため、駆け足での見学となったが、有名画家の数多くの作品を見て満喫することができた。

## 3 社会教育施設の役割

### ①ザンセスハンス風車

ザーンセ・スカンスは17~18世紀のオランダの暮らしを今に残す貴重なエリアで昔ながらの家もそのままの姿で多く残されており、その周囲を散策することができる。一年を通して美しく整備されており、ザーンセ・スカンスを後世まで美しく保とうとする気持ちが感じられる。風車はのどかな見た目だけでなく、オランダの産業発展に多大な貢献をしてきた。ザーン川のほとりは造船の中心地としても栄えたので、今も造船工場があり、行き来する船を見ることができる。このあたり一帯は、近代オランダ産業の集積地といえる。

### ②アムステルダム国立美術館

アムステルダム国立美術館は、16~17世紀を中心に歴史を感じられる展示物が多くある。16~17世紀当時のオランダは、世界に雄飛した商人たちが経済を主導し、その商人たちが家庭に飾ることのできる比較的小さな風俗画が流行した、など絵から時代背景などを学んだり、歴史を身をもって感じられる施設である。

### 【参考文献】

- ・ オランダ旅行オフィシャルガイド HP  
<https://www.holland.com/jp/tourism/destinations/provinces/north-holland/zaanse-schans-jp.htm>
- ・ アムステルダム国立美術館 HP  
<https://www.rijksmuseum.nl/jp/general-information-japanese>
- ・ JTB 公式 HP  
[https://www.jtb.co.jp/kaigai\\_guide/western\\_europe/kingdom\\_of\\_the\\_netherlands/AMS/](https://www.jtb.co.jp/kaigai_guide/western_europe/kingdom_of_the_netherlands/AMS/)

## 海外学校教育実地研究を終えて

### 海外研修を終えて

中村 理依子

海外学校教育実地研究を通じて、どの学校の先生は、児童・生徒を信じていることに素直に「すごいな」と思った。その中でも一番最初に行ったモンテッソーリ小学校では、児童が自ら進んでお仕事（自分で決めた学習）に取り組み、好きな場所（机、廊下や床など）で学習し、小学生の時から自己責任で行動していた。先生方も子供たちを信じて進めている姿に感激した。

私とモンテッソーリ教育の出会いは10年前だった。その頃の私は、どうしたら目の前の児童が自ら考えて行動できるのか、一人一人の長所を伸ばせることができるのか、悩んでいた。だから、ずっと私の心にモンテッソーリ教育が入ったことを覚えている。日本でもモンテッソーリの小学校を探したが数少なく、本の中でしか出会うことが出来なかった。ですから、今回、本物のモンテッソーリスクールをはじめ、多種多様な学校を見ることができ、とても感動し実際に肌で感じて見る事が出来たことがとても嬉しかった。現場に戻ったら、計画表（自分で学習の計画を立てる）や先生方の話し合いもサークルでやってみようと思う。

また、先生方の働き方も理想的な働き方だった。自分の家族の時間を大切にすると共に仕事も進めていることをしている先生方が多かった。オランダやイギリスの学校でも保護者対応や児童の対応などに悩んでいることは、日本と共通の課題だった。

海外の学校を実際に見たことを生かして良いところを取り入れていきたいと考えている。現場に行かせていくことが、今から、とても楽しみである。こんな貴重な機会を与えてくださりありがとうございました。

### 海外研修で考えさせられたこと

直井 仁美

今回初めて海外の学校を訪問する機会を得た。下調べの際から、日本の学校との違いを感じており海外研修の日を心待ちにしていた。私が事前に調べていた「Montessori School Apollo」は、外観・内観ともにカラフルで、校舎内のいたるところに植物が置かれており、おしゃれでかわいい印象を受けた。日本の学校は同じような印象を受けるため、海外の学校は雰囲気からして好奇心をそそられた。

また、実際に授業を見学すると、同じ教室内でも各々が個別の課題に取り組んでおり、児童からは「勉強させられている」という印象は受けなかった。それは、児童が自分自身で時間割を決めることが出来ることや、好きな場所で学習にとり組むことが出来るということと関連しているように思う。日本では考えられないが、本校では廊下に設けられた学習スペースや、教室内に敷かれた御座のようなものの上で学習する姿が見受けられた。

このように、今回の研修を通して海外の文化に触れ、普段経験することのできないような素晴らしい体験をすることが出来たのは、わたしにとって貴重な経験となった。

しかし、ここで押さえておきたいのは、海外の教育と日本の教育のどちらが優れているかということではないということである。日本には日本の良さがあり、オランダにはオランダの、イギリスにはイギリスの良さがある。海外でうまくいったことを、そのまま日本で取り入れても、日本の良さは生かさず、上手くはいかないだろう。来年から教師として現場に立つ身として、今回の経験を生かし、子どもたちがのびのびと、そして楽しく学ぶことができるようサポートしていきたい。

## オランダ・イギリスの学校訪問を通じて

青山 直樹

2つの国の教育制度と日本のとはかなりの相違点があることを実際に学校訪問を通じて見れた。

オランダの学校では、一つのクラスに異年齢の子どもが混じり個別進行の学習システムという斬新な発想で見事に授業が組まれていた。教材がそれに合わせて整っており進めやすさもあると思われる。特別支援学校では取り入れられそうなスタイルと教材であり今後、私の教材研究のテーマとしても扱いたい。また曜日で担任が替わることで責任の分化をしていた。それは今の日本の働き方改革の一つ解決策が記されていると感じた。

イギリスでは能力別クラスでの学習が実施されており、成績順のクラス分けで授業がされ能力に合わせた授業を見ることができた。授業は日本と同じ一斉形式であるところに親近感が持てる。実際の授業は能力の高いクラスほど先生の干渉は低く、低いクラスほど干渉が高いそれに応じて支援の頻度も高くなるそうである。

イギリス人と結婚した日本人の先生の話は興味深く、国ごとの家庭教育について知ることができた。イギリス人はとにかく子どもを誉める、日本人は子どもの出来ないところに目が行くという、子どもが成長し、彼は肝心なところで自信のなさをあらわにし、行動を実行に移すことに躊躇するとことがあるとその先生はわれわれに教えてくれた、自分の行ってきたことに反省をしているという。

海外の学校を実際に見るということ、そこで暮らす方と知り合うことは、なかなかできることはではなく、この機会は私の教員人生に新しい視点を与えてくれた。

## オランダ・イギリスと日本の教育を比べて

佐々木 祐

今回の研修において訪れたオランダとイギリスという国は、その文化はもちろん地理的な面や教育も正反対と言っていいほどに違いを感じた。

今回の訪問で一番衝撃的だったことは、オランダの教育の在り方である。オランダの良いところを漢字2文字で表せば「寛容」である。この寛容さは、オランダの良き文化である。教師と生徒が一体となり、1つの授業を作り上げるオランダの授業風景は日本も見習わなければならないと強く感じさせた。オランダの教育は日本の2歩先に行くものだろう。しかしその反面、切磋琢磨し互いに磨き上げるという「競争心」そのようなものは日本よりも劣っているように思えた。誰もが自分で考え、自分の好きなことをやるというそのスタイルを極めようとした結果、誰にも負けない個性と引き換えに誰かと競い合い切磋琢磨する心は薄れてしまっているのかもしれない。

イギリスの教育はオランダとは正反対で、むしろ日本に近いものを感じた。ニューキャッスルからグラム市内に向かう車窓からも見て取れたが、その国土も日本を思わせるものがあつた。日本とイギリスは切っても切れない縁があることを感じた。しかしその中でも果敢にアクティブラーニングに挑む姿からは、日本の授業にどのように導入していくべきかその道筋を見出すことができた。

今回の訪問で一番学んだことは、新しさと古き良き文化を如何に共存させるのかを考える大切さである。確かにオランダの教育やイギリスの教育には、日本には無い良さがたくさんある。しかし、それと同時に他の国には無い日本の良さもたくさん見つけることができた。大切なのは他国の良さをういて、日本の良さを生かしながら如何に欠点を補うかを考えることである。そのためにはただ真似をするのではなく、それぞれの良さを持った新しい教育の姿を追い求めていく必要があると感じた。



## 「海外学校教育実施研究」で学んだこと

坂内 啓太郎

私は高等学校時代に、オーストラリアに3週間ホームステイをする機会があり、その間メルボルンにある日本人学校に通学していた経験がある。今回、私が「海外学校教育実施研究」への参加を決めた理由は、海外の教育現場を、学校で学ぶ生徒の視点ではなく、教員を志す立場として、視察してみたいと考えたからである。オランダとイギリスの教育現場を視察してみて、私の記憶の中には、オランダの教育が印象に残った。その理由は、オランダの教育制度が日本の教育制度と大きく異なり、その差異が生徒の学習への取り組み方に強く表れているように感じたからである。

オランダの教育制度では、12歳の時に受ける一斉模試の結果を元に、その後の進路を選択しなくてはならないため、視察した教育現場では、子ども達が自らの学習のスケジュールを管理している場面を多く見られた。このことから、初等教育機関の頃から、自身のスケジュール管理や将来の見通しを立てるための指導が重視されているように感じた。また視察の中で、オランダと日本の教育を比較する機会が多くあり、日本の教育の良さを2点再発見することもできた。

1点目は、日本では板書を通して、授業展開を組み立てる点である。私は正直板書が得意な方ではないので、生徒が理解しやすい板書を作ることができるよう、工夫を重ねていきたいと思う。2点目は、栄養が考えられた給食が学校内で提供されている点である。視察したオランダ・イギリスでは、食事を家庭から生徒が持ってきているため、生徒によっては栄養素に偏りがあるように感じる状況であった。「海外学校教育実施研究」は、日本の教育を見直す新たな視点を得る機会となり、大変意義のある海外研修となったように思う。

## グローバル化に向けて考えること

富樫 幸乃

今回の実地研究では、オランダとイギリスという2つの国の学校を訪問することができた。私はイエナプラン教育に興味を持ち、主にオランダの教育について事前に学んだ。そこでオランダの個別教育について知り、「実際にこのような個別教育が可能なのか。」「可能だとしたら、どのように成立しているのか。」という強い関心を持って、実地研究に臨んだ。

実際に訪問したオランダの3つの小学校では、それぞれ教育方法の違いはあったが、「子どもは一人ひとり違う」という考えのもと、子どもたちは自分のペースで主体的に学んでいた。他人との比較ではなく、「自分が何をしたいか」、「何ができるか」が大切にされている。みんなが「特別」という環境の中で、支援を必要とする子どもたちは「特別」ではない個人として存在しているようだった。イエナプラン教育の小学校で、子どもたちに「支援を必要とする友だちをどのように受け入れ、コミュニケーションを取るか。」という質問をした。「支援を必要とする友だちも私も、個性を持った一人の人であることは変わらない。」「足が不自由でも、手で投げる事が得意かもしれない。自分は足の不自由さを助け、投げることを教えてもらおう。」といった意見を聞いた。驚いたことは、その意見の内容だけでなく、その場にいたほとんどの子どもたちが発言しようという積極性だった。

日本でも個別教育が注目されているが、まだ「教員が個別に対応する」といった程度の認識であることが多い。今回の訪問で日本とは違った個別教育に触れ、本当の個性の尊重とは何か、個性の尊重から生まれる子どもの発言力について考えさせられた。グローバル社会を自分らしく生き抜ける子どもたちの教育に、これから少しでも貢献していきたい。

## オランダ・イギリスの学校訪問を通じて

須賀 愛加

2つの国の教育制度と日本のとはかなりの相違点があることを実際に学校訪問を通じて見れた。

オランダの学校では、一つのクラスに異年齢の子どもが混じり個別進行の学習システムという斬新な発想で見事に授業が組まれていた。教材がそれに合わせて整っており進めやすさもあると思われる。特別支援学校では取り入れられそうなスタイルと教材であり今後、私の教材研究のテーマとしても扱いたい。また曜日で担任が替わることで責任の分化をしていた。それは今の日本の働き方改革の一つ解決策が記されていると感じた。

イギリスでは能力別クラスでの学習が実施されており、成績順のクラス分けで授業がされ能力に合わせた授業を見ることができた。授業は日本と同じ一斉形式であるところに親近感が持てる。実際の授業は能力の高いクラスほど先生の干渉は低く、低いクラスほど干渉が高いそれに応じて支援の頻度も高くなるそうである。

イギリス人と結婚した日本人の先生の話は興味深く、国ごとの家庭教育について知ることができた。イギリス人はとにかく子どもを誉める、日本人は子どもの出来ないところに目が行くという、子どもが成長し、彼は肝心なところで自信のなさをあらわにし、行動を実行に移すことに躊躇するとことがあるとその先生はわれわれに教えてくれた、自分の行ってきたことに反省をしているという。

海外の学校を実際に見るということ、そこで暮らす方と知り合うことは、なかなかできることはではなく、この機会は私の教員人生に新しい視点を与えて

## 個性を大切にすることも

古川 明恵

「みんな違う人間。足が不自由な友達がいたらその子は手を使うことがきつと得意だから手の使い方を教わります。」研修の中で一番心に残っている子どもの言葉。オランダのカルーセル小学校(イエナ・プラン教育)で「特別な支援が必要な友達にどのように関わりますか？」という質問に挙手をするたくさん子どもたち。一人一人の個性を大切にしている姿に感動した。そこでオランダ教育のよさについて述べていきたい。

どの小学校も共通しているところは異年齢集団で学習していること。異年齢集団で学習することで教える・教えてもらう経験や助ける・助けてもらう経験、歳が違っても一緒に勉強して「分かった!」という喜びを経験できる。さらに協調性も育まれる。また学習する内容を自分で選択できること。自分自身が学びたいことを学習できることが学習意欲を高めるとともに、責任感や自立心を育てることができるようだ。

モンテッソーリ小学校では高学年まで半具体物を使って学習する。半具体物で考えることで実際に手を動かしながら考えられる。頭の中で考えていたことが視覚化することで具体的に理解しやすくなる。また学習する場所は椅子に座ってもいいし広間に座って学習してもいい。個に合った環境が選べるのである。

このように子ども一人一人の存在が認められる場や主体的に活動できる場が設定されていた。これらが個性を大切にすることもを育てることに繋がっているのだろう。学んだことを学校現場で生かしていきたい。

## オランダ・イギリスを訪問して

小松崎 智理

オランダ・イギリスの学校を見学し、多くのことを学ぶことが出来た。日本との違いや共通点をたくさん知ることによって私自身の考え方も少し変化したと思う。

最初の訪問国オランダでは、5つの学校を訪問した。一番驚いたのは、時間割の作成方法である。日本では、先生が全ての時間割を決め学期始めに配るのが一般的であるが、オランダのほとんどの学校では時間割を自分自身で作成する。同じ学年、クラスであっても、1人1人抱えている課題は違っているためだ。先生は、1人1人の学習状況を把握しなければならないが、完全な個の支援になっていた。さらに、1人1人課題を行う場所は自由であり、廊下に設置されていた机や、床の上で学習している児童が多くいた。

2つ目の訪問国イギリスでは、3つの学校を訪問した。制服があることや授業の形式は一斉授業であることは日本の授業に似ていた。ドラムジョンストンでは、シックスフォームの学生の専用スペースがあり、大学進学がどれほど大事にされているのかがうかがえた。ドラムスクールは1414年創立の伝統校で、古くからの伝統が残っており、歴史が長いイギリスならではの感じだ。特に、スポーツの面で強く伝統が残っていた。

今回の研修では他にも様々な学校制度やその国の文化を学ぶことができた。学んだことは全て自分の引き出しとして、今後の教育実践に生かしていきたい。

## 大人の目とこどもの心で学んだ外国語活動

多田 将大

「学ぶ」ってわくわくする。私は平成30年度「海外学校教育実地研究」を通して、やはり改めてこのように感じた。この海外学校教育実地研究に参加するにあたって、2つのテーマを自身の課題として設定した。1つ目はイギリス、オランダの教育と日本の教育の比較だ。比較するためには、事前に日本の教育を整理する必要がある。そして現地に行き、異国でたくさんの刺激を感じようとした。2つ目は「学ぶ姿勢」をもう一度体験することであった。大人になったり、教員になるための勉強をしたりしていると、どうしても学ぶ側の感覚や姿勢を味わう機会が少なくなったように思える。今回頂いた機会を利用し、十分に学ぶことを考えようとした。

現地に到着し、いくつもの学校を訪問させてもらった。どれも実に多様な特徴を持つ学校だった。しかし、一貫して言えることがあった。それは学校で行なわれている教育とは「人対人」という関係だ。これは「大人対こども」でも「教える人対教えられる人」でもないということである。どのように学ぶかはその児童・生徒が決めているようだった。日本の教育をベースとしている私たちが参観すると、教科や時間、教材や場所を自分で選択し、他者と同じ空間を共有していることは目を疑うような光景で、理解するのに時間がかかった。また、教員を必要とするかも児童・生徒の判断に任せられていて、教員自身も必要以上に学習者への介入はしていないようだった。

新しく刺激的な環境、事実、光景、世界に触れると「おもしろい」「もっと知りたい」という気持ちが生まれた。これを学校現場でも活かさないかと考えた。例えば、学校で児童・生徒が新しい単元や事象を学習する際に同じような感情を抱くことができれば、学習がより深まると思う。出会い方が「主体的・対話的で深い学び」を実現するための1つの方法と海外学校教育実地研究で身をもって知った。4月からの教育活動に最大限活かしたい、がんばります!!



## イギリス学校訪問を終えて

山地 雄斗

イギリスの学校訪問を通して最も驚いたのは、イギリスの学生たちの大半が日本での中学卒業程度の年齢で自身の将来を明確に設定し、それに向けて努力していることである。大学受験を目指す Sixth form の学生は、就きたい職業に向けどの学部に入るか、どの科目で A レベルを目指すか決める。それ以外の学生は、どのような職業に就くか見据え職業訓練を数年に渡って受け即戦力として社会へ参画する。それに対し、漠然と高校、大学へ入学している学生は日本に一体どれほどいるだろうと考えさせられた。

日本とイギリスの学生の進路選択における意識の違いには小中学校からのキャリア教育や宗教、文化的な背景、国の制度等様々な要因があると考えられる。しかし、イギリスの授業見学を通して得た感想は、授業風景自体は日本と大きく異ならない、である。特別な支援が必要な児童へ手立てを講じたり、学年が上がれば少人数授業を組んでいたりと、日本との共通点もしばしば見られた。

では、なぜ意識にそこまでの違いがあるのか。それは、大学入学試験の難易度と小中のキャリア教育にあると感じた。私が担当した Durham Johnston comprehensive school では 11-14 歳のカリキュラムに PSHE が週に一回組み込まれている。PSHE は端的に表すと「いかに生きるかという価値観の育成」であり、この年齢から社会へ参画すること、他者との協働、自身の価値の育成等を行っている。そして、この継続が後の進路選択へ繋がっている。私は小学校の教師として、いかに生徒たちに将来を見据える視点を養わせることができるのか考えていくべきだと感じた。

私は今回の海外研修を通して見識が大きく広がった。それは今まで実際に触れたことのなかった多くのものに触れることが出来たからである。同様な実感を生徒たちに落とし込むことができる教育を模索していきたい。

## 実際に経験することの重要性

祐松 智紀

今まで海外の学校教育や文化について、話を聞いたり本を読んだり、写真や映像を見たりして学んできたが、どれも間接的な学習であり、直接海外の学校教育や文化に触れたことはなかった。

しかし、今回の実地研究を通して、実に様々なものに直接触れ、肌で感じる事ができた。

まずオランダでは、学校で子どもが一人ひとり全く異なる作業を平然としており、かといって学級崩壊のようなものは全く感じられず、「自分たちでやることを決めて自主的に活動するというのはこういうことなのか」と感じる事ができた。

風車見学の際は、実際に風車の内部で歯車の動く様子や、岩を砕いて塗料をつくっている様子を見ることができ、非常にいい経験となった。

またイギリスでは、Tynemouth にある修道院跡に行き、その中で人々がどのような暮らしをしていたのかを垣間見ることができた。テレビでよく見るような薄茶色のレンガの建物に実際に触れ、窓のガラス絵を見て、「ああ昔の人はここで礼拝を行っていたのか…」などと思いを馳せた。

さらに Draham School では、建物の外観等から歴史、伝統を重んじている様子が感じられ、さらに校内の案内をしてくれた Six form の学生をはじめとして多くの学生の振る舞いから、ジェントルマンらしさを感じる事ができた。

以上のことはどれもこれも私が個人的に感じたものであり、確かな根拠があるものは何もないが、私が上記のように感じたことは事実である。

また、実際に外国の人と会話をすることで、その人の温かさ、面白さに触れ、楽しい時間を過ごせた。海外経験が少なく外国人と話すことに不安を抱いていた私にとって、貴重な経験となった。

今回の実地研究を通して、言葉では表せない、実際にそこで体験することでしか得られないものを得ることができたと感じる。

## イギリス・オランダ実地研究を終えて

柏木 志保

私は今回のオランダ・イギリスの実地研究を通じて多くの学びを得ることができたと感じる。学校訪問をさせていただいた際に、特に2点のことが印象に残っている。

まず1点目は、児童生徒たちがとても主体的であるということだ。子どもたちは自分が何をしなければならないのか、何をもっと勉強したいのかということを考えながら自分の考えを持って行動していた。例えば教室の中で勉強していてもパソコンを使用していたり、子どもによって異なるプリントやテキストを見ていたり、廊下で勉強をしている子どももいた。このように自分の考えや自主性を尊重する教育をしているからこそ、「クラスに特別な支援を必要とする生徒がいる場合、どんな配慮をしているのか」という質問に対して、子どもたちは特別だという意識があまりなく、誰にでも得意不得意があることと変わらない、といった考え方ができているのではないかと思う。

2点目は、教員たちがとてもおしゃれでかっこいいと感じたことである。見た目や格好のことだけではなく、どの先生も生き生きとしていて楽しそうにしている人が多いということに驚いた。オランダやイギリスの教員がそのように見える理由としては、やはり教員の働く環境の違いもあるのではないかと考えた。勤務時間や教員の行う仕事内容など、多くの点で日本の教員との違いがあり、ワークライフバランスが取れている教員が多いのではないかとも思った。このような生活を送ることができる環境が整っていることを国や文化の違いなどと捉えるのではなく、日本でもそんな環境を整えていく努力をしなければならないと思う。

今回、非常に貴重な経験をすることができたと感じるので、現在私が知っていることや環境が当たり前だと思うのではなく、視野を広く持ち、学んだことを今後、自分が教員になったときに生かしていきたい。